鈴ぐろっけ

ぐろっけ
平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十八年六月一日発行（毎月一回一日発行）
第十三巻第六号（通巻第一四六号）

俳句雑誌

GLOCKE

第146号
6. 2006

青葉木菟

品川鈴子

青葉木菟（あおばずく）目くばり大手搦手へ

目離せば森に紛るる青葉木菟

抱卵の雌に距る雄の拠枝

青葉木菟くぐもり声の楠連理

PDF= 俳誌の salon

琴の音に香聞くビルの窓若葉

黙祷に誰袖匂ふ鈴の会

一泊の懸念漬け梅水あがる

紫蘇揉めば恋女房の香りなる

神饌貢國日矢に煌く青葉潮

漁の舟送り迎への日焼翁

PDF= 俳誌の salon

玉鈴吟

愛媛　村上　和子

ショパン聴きのどかに胎の子とすごす
啓蟄の雨のドンタク農一家
久々に薪で炊く飯建国日
鶯の藪棲み替へし水害地
空砲を天へ一発猟期果つ

大阪　師岡　洋子

歯にふれて冷たき夜の躾糸
土筆むく卒寿の母の手を見つむ
立春の日差の窓辺新刊書
天窓につのる雨音雛飾る
公園の水に遊んで雀の子

兵庫　八木柊一郎

町風のしかと抜けゆく目刺の眼
春光にわが老醜を疑はず
春耕の遠目に山の目覚めをり
仏壇に埃うつすら春の風邪

東京　安田とし子

啓蟄の境界杭をうち糺す
てのひらに測りてレタス選りてをり
枕頭に携帯電話春の風邪
地を蹴りてふらここ高きへ漕ぎはじむ
啓蟄にその名を知らぬ虫あまた

香川　合川月林子

気合入れ見よう見まねで剪定す
海見ゆる高さにありて剪定す
走者には向ひ風なる東風日和
何事も起こらず仕舞ひ水温む
水温み水底きらと日を弾く

大阪　赤木　真理

子供らと屋根に登りて子供の日
子を少し叱りすぎたと麦の秋
梅雨明けのゴム長ぐつのかかと減り
ないしよ事しまふ引き出しスキートピー
通園にいつも逢ふ犬金鳳花

PDF= 俳誌の salon

兵庫　秋田　直己

下刈りに鎌の切れ味山始め
塾長に背(せな)を押されて大試験
口鼻入れ孫によく似る雛なり
公園の少年サッカー風光る
春日和ペダルを踏んでジム通ひ

愛媛　足利　錞子

一合の卵酒に酔ふ老ぐらし
遠出して膝のうづきし建国日
啓蟄や政変聞きつつ厨事
仮杭の打たれし崖に黄水仙
国土庁仮杭打ちや下萌ゆる

愛媛　足利　徹

発電の水車へ急ぐ春の水
岸けづる発電終へし雪解水
山姥の尿に雪解の始まりし
捨て舟の埋もる浜を鳥帰る
鴨帰り釣人のみが残さるる

大阪　尼嵜太一郎

水溜り跨ぐが如く年越せり
冬木の芽除けて結びぬ凶神籤
目覚めゐて鉛の目蓋寝正月
七草菜水躍らせて洗ひをり
天井に木目の変化寝正月

兵庫　荒木治代

寺余寒うす暗がりの長廊下
春遅し天気予報士伏目がち
遅々として芽の整はずいぢけ鉢
手を逸れし風船迷ふ巨き駅
春の風邪猫を頼りに臥してをり

大阪　池田かよ

春睡の金欄衾に枕経
南無南無とほころぶ供華のフリージア
待ち佗びて春を探しに夫逝けり
星おぼろ無垢の骨壷抱きしめる
遺影より抜け出して欲し春夕べ

PDF= 俳誌の salon

薬草歳時記

（一四五）シラン（紫蘭）

三輪慶子

紫蘭は私の大好きな花のひとつです。

らん科の植物は栽培がむつかしく、高価なものが多い中で、この紫蘭はひっそりとしずかに、どこにでも育ち、紫の上品な花を咲かせます。

名前は花の色と姿から付けられたと云われています。最近は鑑賞用として盛んに栽培され、白色の花もときにみられます。

この花が薬草と聞いて驚く人も多いと思います。薬用部分は鱗茎で白芨（びゃっきゅう）といいます。

秋に球茎を掘りあげ、皮を去り、水洗い後、蒸すか又は熱湯に数分間浸してから日干しにします。

球茎に粘液質のブレティラグルコマンナン及びでんぷんを含みます。薬効はこの粘液質の膠状成分と関係があり作用の原理の多くは物理的なものと云われています。つまり、高度な粘性でキズをふさぐというのです。

白芨は性味が苦・寒で、質が粘かつ渋であり収斂止血の良薬です。肺経に入り、喀血、吐血、鼻血など多くの出血に有効です。又、消腫生肌の効能があり、瘡瘍腫瘍の初期に内服すると散結消腫します。

胃カタルなど胃の痛みには一日1～3 gを煎じて飲みます。

喀血には単味であるいは枇杷薬などと用います（白芨枇杷丸）。吐血には単味であるいは田七、烏賊骨などと用います（烏芨合剤）。

外傷の出血には単味で、あるいは石膏と粉末にして用います。やけどやあかぎれには粉末をごま油と練って患部に塗布します。

馬が毒草で中毒を起こしたときに白芨1、甘草4、食塩2の割合で混合したものを水で飲ませるとよいということです。

らん科の植物で薬草として有名なものに石斛や天麻があります。石斛はセッコク、天麻はオニノヤガラです。

今年も紫蘭の優しい花が咲くのが楽しみです。

参考文献「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館
「薬草カラー図鑑」　主婦の友社
「中薬大辞典」　小学館
「中薬学」　神戸中医学研究会

著者略歴　神戸薬科大学卒　薬剤師

PDF= 俳誌の salon

君知るや薬草園に紫蘭あり　高浜　虚子

紫蘭咲いていささかは岩もあはれなり　北原　白秋

ゆふかぜのしゞにしらんの一ト(ぐろ)たむろ　久保田万太郎

繋がれし牛のかたへに紫蘭咲く　桜間ひろし

司書の眼をときどきあげて紫蘭咲く　富安　風生

雨を見て眉重くゐる紫蘭かな　岡本　眸

地震あとの紫蘭は笹を被りゐる　火村　卓造

朽ち巣てし東司の出窓紫蘭咲く　安倉　彰彦

局(つぼね)塚その面影の紫蘭咲き　下村ひろし

紫蘭の鉢ならぶ軒ト鍼灸院　塩出　眞一

PDF＝俳誌の salon

鈴の奏

品川鈴子選

初外出（はつとで）をジムの入会米寿とや　兵庫　村田とくみ
着ぶくれは体重計を下りてより　寒風へ少女のブーツピンヒール
鏡台の前乱雑に風邪籠り　プレハブの仮校舎より卒業す　香川　近藤　倫子
本番も外す子のゐて卒業歌　水温むジーンズの裾綻ばせ
ラジコンの少年掠めしやぼん玉　軍艦と山に塞がる寒き町　大阪　角谷美恵子
見え隠れ野うさぎ走る野菜畑　春雷に体内時計コチと鳴る
鮑子の萬の目とあう昼厨　汀田島の春潮ここゆ征きし者　東京　遠藤とも子
栄光の春在り艦首に御紋章　軍艦旗よく売れうらミュージアム
海を向く海軍墓地に春日影　春めきて出不精の夫旅支度　兵庫　先山　実子

行きずりに一盛買いし蕗の薹　春隣句会の席へ鶏の声
南天の実も啄まず鳥何処に　和太鼓の音の近づくつくしんぼ　兵庫　山本　歌子
茎立ちぬ食器洗ひのにぶき音　古本に押し花のありシャボン玉
葱坊主けんかしてゐて逢ひたきや　上着ぬぎ帽子をとりて春の風　徳島　河井富美子
万の矢の折れし戦場敗蓮田　買ひ手つき声の弾みし鰯売り
咳おさふバリトンの声響きゐて　御水取暁（あけ）よりの雨昏れるまで　兵庫　林　美智
嫂は母国語忘れ涅槃西風　春の野にひとり遊ぶ子けんけんば
春霞顔かおかほの砂の風呂　寄せ鍋の湯気を挟んで顔二つ　埼玉　松木　清川
放鳥の巣籠りなるかこうのとり

PDF= 俳誌の salon

秀鈴記

巻頭三句　品川鈴子　評
四句～十五句　竹下昭子
〃

初外出（はつとで）をジムの入会米寿とや　村田とくみ

年明け早々に外出するのは、ジムへの入会のためとか。ジムとはプールや筋肉を鍛える機械を備えたトレーニングジムかそれともボクシングの練習場なのか。当人は今年米寿を迎えると聞けば、なんと健全な齢を重ねたことかと思わず拍手をしたくなる程。

本番も外す子のゐて卒業歌　近藤　倫子

卒業の記念に全員で合唱することとなり、張り切って練習した。だがなかなかぴったりと揃わないが、そのままに卒業式の当日を迎えた。そしてやはり本番でも音の外れる子もいたが、それぞれに精一杯のことをしたという満足感を得た。

軍艦と山に塞がる寒き町　角谷美恵子

戦をしらぬ、平穏な世にも、基地の町には軍艦が巨体を横たえ、山に塞がれて寒々としたたたずまい。その存在があればこその平和を実感する眺め。

江田島の春潮ここゆ征きし者　遠藤とも子

江田島と聞けばある年代以上の人にとっては夫が、息子が、父が…と海軍兵学校を想い、太平洋戦争末期には特攻隊となって海に消えていった悲しい思い出につながることでしょう。春潮という、ゆったりと力強い波は時代の流れに抗いきれなかった人々への哀悼と、現在私達が生かされている感謝とを感じます。（ここゆの「ゆ」は時間的、空間的起点を表します。～からの意）

春めきて出不精の夫旅支度　先山　実子

PDF＝俳誌の salon

日脚が伸び、春めいてくると心が浮き立ちお誘いも増え、出不精な人もついつい旅に出たくなります。カレンダーに予定を入れたり、カメラや帽子やら旅仕度。御主人のそわそわした楽しいムード。

和太鼓の音の近づくつくしんぼ　　山本　歌子

太鼓のリズムにぬっくぬっくと伸びる土筆。春の祭典のための太鼓の練習でしょうか。太鼓の桴にも似た土筆。春の喜びにあふれています。

万の矢の折れし戦場敗蓮田　　河井富美子

源平の戦でしょうか。応仁の乱の跡でしょうか。敗蓮から矢の折れたり、突き刺さったりと、古戦場へと想いを誘って呉れますが、悲槍感の漂わない面白い句になっています。

春の野にひとり遊ぶ子けんけんぱ　　林　美智

今の子もけんけんぱで遊んでいるのでしょうか。むしろ作者のノスタルジア（郷愁）を感じます。昔は町の子も裸電球の灯る頃まで夢中になって遊んだものでした。今は少子化で春になって皆と遊ぼうと思っても、お稽古事や塾通いに忙しく一人でぽつんと遊ぶ子も多いかしら。

枝垂梅笑みをこらへる地蔵尊　　松木　清川

春と地蔵様、「笑みをこらえる」なんて、絵本の世界のようです。枝垂れ梅の可愛いさ、日本の原風景。誰の心もなごみます。

断層はいま活動期土筆出づ　　松本　恒司

阪神大震災でむき出しになった断層に、季節はきちんとそのサイクルを守り、土筆が生えて来ます。自然の恐ろしさと素晴らしさ、人は自然の前に脱帽です。（以下略）

PDF= 俳誌の salon